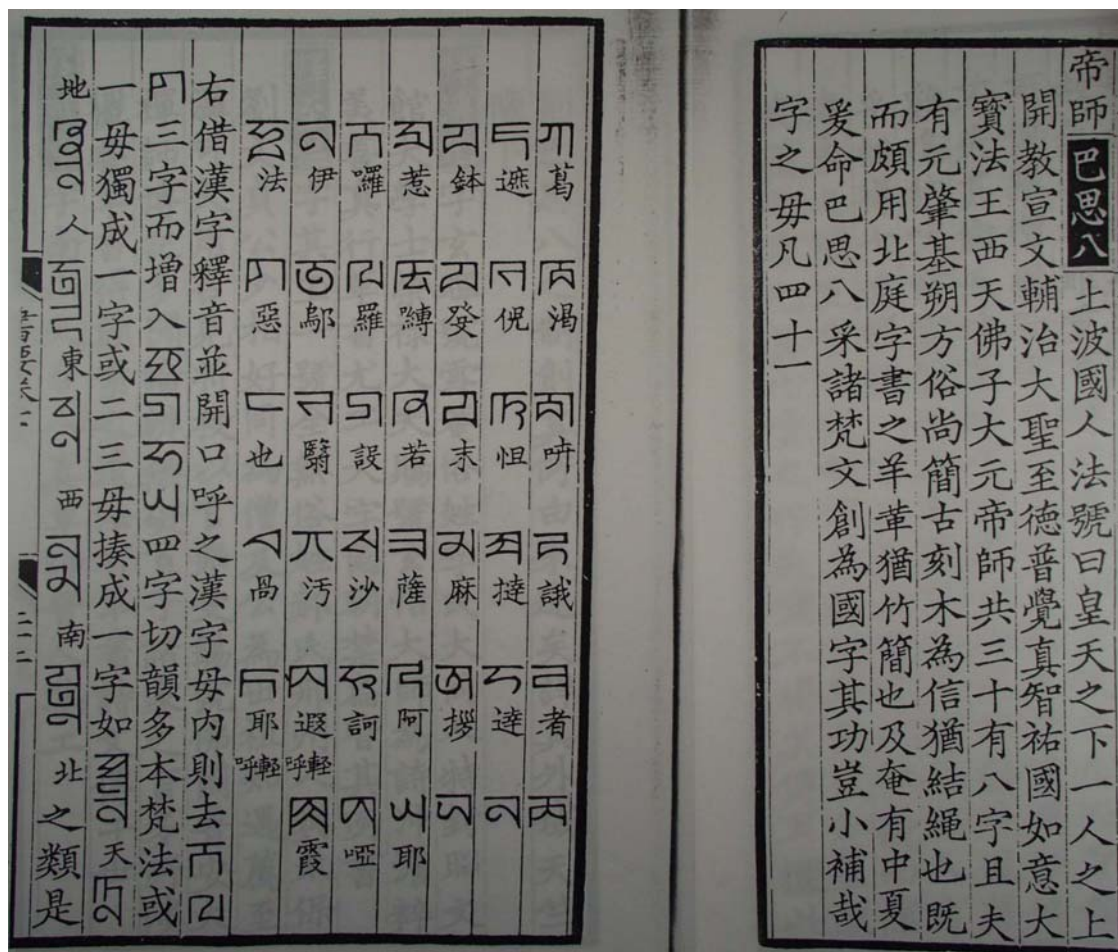


書史会要パスパ文字字母表のeなどについて

吉池孝一

一

元の盛熙明著『法書考』と明初の陶宗儀著『書史会要』（1376年）および民国九年（1920）の柯劭忞著『新元史』には同一の伝承に基づくパスパ文字の字母表が掲載されている。『新元史』の表は『書史会要』の系統のもので、字形は一層崩れており、新たな情報はない。『法書考』には四部叢刊続編本と四庫全書本があるけれども、一部の字形を除き、概して四部叢刊続編本のほうが整っている。『書史会要』には洪武刊本、崇禎刊本、四庫全書本などがあるけれども、洪武刊本がよい。『法書考』『書史会要』の諸版を比べると洪武刊本の『書史会要』が最良である。以下に『書史会要』洪武刊本の字母表を掲げる。



字母表の字形について言うならば、諸本ともに精密さを欠いており、これのみに拠って本来の字形がどの様であったかを決定するのは困難な場合がある。字形が比較的正確な洪武刊本『書史会要』によっても字母表の一部(27, 24。下表参照)と増入字母の一部(43, 45)とは区別がつかない。正確な字形は、碑文や『蒙古字韻』など他の資料により「解釈を加えて」決定せざるを得ずこの解釈の適否が問題となる。以下に字母表を整理し、ローマ字翻字を付して提示する(注1)。なお、音訳漢字に()を付したものは『書史会要』になく『法書考』で補ったものである。

「爰に、巴思八に命じ諸梵文を采りて国字を創為せしむ。其の功、豈に小補ならんや。字の母、凡そ四十一。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
᠎ᠠ	᠎ᠠ'	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ
k	k'	g	ŋ	č	č'	ǰ	ñ	t	t'	d	n	p	p'
葛	渴	哂	譏	者	(車)	遮	倪	怛	撻	達	(那)	鉢	發

15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ
b	m	c	c'	j	v	ž	z	·	y	r	l	š	s
末	麻	拶	(捺)	惹	嘑	若	薩	阿	耶	囉	羅	設	沙

29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41		
᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ	᠎ᠠ		
h	'	i	u	é	o	q	γ	f	᠎ᠠ	ĩ	ũ	e		
訶	啞	伊	鄔	翳	汚	遐	輕呼	霞	法	惡	也	尙	耶	輕呼

右、漢字を借りて音を釈し、並びに口を開きて之を呼ぶ。漢字母の内にあるは則ち **᠎ᠠ**_r(25)、**᠎ᠠ**_q(35)、**᠎ᠠ**_{᠎ᠠ}(38)の三字を去り、而して **᠎ᠠ**_f(42)、**᠎ᠠ**_š(43)、**᠎ᠠ**_h(44)、**᠎ᠠ**_y(45)の四字を増入す。」

41字母から3字を取り去り、新たに4字付け加えた数、すなわち42字母が漢語の字母であるという。この字母表が、いつ、誰によって、何のために、どの様にして作られたのか、またパスパ文字研究にとってどの様な価値を持つのか（注2）という事が問題となるけれども、それは字母表の細部の検討の後のことであろう。まずは字母表につき気の付いた点を提示する。

二

『書史会要』の字母表より母音と半母音を取り出すと次のようである。

31	32	33	34	...	39	40	41
ㄨ	ㄜ	ㄛ	ㄝ		ㄝ	ㄜ	ㄝ
i	u	é	o		ĩ	ũ	e
伊	鄔	翳	汚		也	髙	耶輕呼

上記のような解釈が本稿の立場であるけれども、Clauson,G.1959（注3）はこの部分を以下のようにする。なお、これ以降、便宜のため各氏のローマ字翻字は、先の翻字法に改め統一して提示する。

31	32	33	34	...	39	40	41
ㄨ	ㄜ	ㄛ	ㄝ		ㄝ	ㄜ	ㄝ
i	u	é	o		e	ũ	ĩ
伊	鄔	翳	汚		也	髙	耶輕呼

『書史会要』の字母39番と41番を、本稿は「39 ĩ、41 e」と解釈する。Clauson,G.1959は「39 e、41 ĩ」のように逆とする。中野美代子1964（注4）は「39 ĩ、41 e」とするけれども、その後中野美代子1971とMiyoko Nakano1971（注5）はClauson氏と同様に「39 e、41 ĩ」に変えている。照那斯図1980、照那斯図・楊耐思1984、照那斯図・楊耐思1987（注6）は一貫して「39 e、41 ĩ」とする。Clauson,G.1959以来「39 e、41 ĩ」とされているけれども、これは誤解であり、「39 ĩ、41 e」とすべきである。

パスパ文字のĩとeの字形を碑文に求めると（下図参照）、ĩは左上にやや反り上がっており、eの方は逆に左下にやや垂れ下がっている。『書史会要』の39は左上にやや反り上がっており、41は左下に線が垂れ下がっている（下図参照）。『法書考』の39が左上に反りあがっていること明らかである。一方、41は『書史会要』とは逆に左上に線がとび出ている（下図参照）。『法書考』の41に問題はあるけれども、両書合わせ見るならば39はĩであり41はeであることは了解されよう。それは字母表の構成の上からも首肯し得る。41に付されている漢字音注「輕呼」の意味は未だ不明であるが、「39 e、40 ũ、41

「i軽呼」とすると、同じ半母音ü, iの一方にのみ「軽呼」が付されていることになり説明が複雑なものとなる。「39 i、40 ü、41 e軽呼」であるならば、eのみに付された情報として処理することができる。eの音価ないし働きについては諸論あり未だに定まっていない。「軽呼」という注はeをめぐる議論を進めるうえで参考となる。

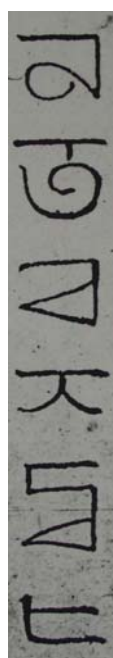
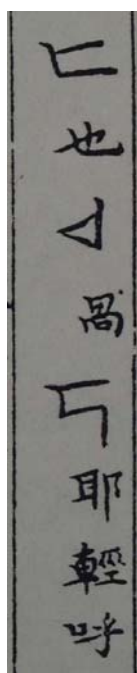
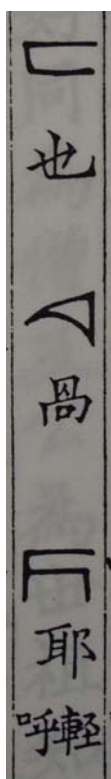
なお、「39 i、41 e」とあるものが「39 e、41 i」と誤解され訂正を受けずに今日に及んだ理由の一端として、『蒙古字韻』の字母表（「字母」上冊第五葉の表裏）にみえる母音と半母音の配列順序の影響をあげることができる。『蒙古字韻』の字母表では「i、u、é、o、e、ü、i」の順に並んでおり（下図参照）、これによって『書史会要』の字母表を解釈するならば「39 e、41 i」となる。



行híiŋのi



宣süenのe



「加封孔子詔碑」拓本

『書史会要』

『法書考』

『蒙古字韻』

(上から39,40,41の順)

(eとüは繋がっている)

資料

- ・「加封孔子詔碑」『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本彙編048』中州古籍出版社、1990年、第192頁による。
- ・『書史会要』（明洪武本影印）上海書店、1984年、第344-345頁による。
- ・『法書考』四部叢刊続編（五〇）上海書店、1984年、第三葉表による。

・『蒙古字韻』大英博物館蔵本マイクロフィルム、上冊第五裏による。

注

- 1) このローマ字翻字は「言語文化接触に関する研究」（2000年3月24日。アジア・アフリカ言語文化研究所）という研究会において配布した案に修正を加え「パスパ文字の字母表」（『KOTONOHA』37号、2005年 12月）として公表したものである。
- 2) 照那斯圖1980,「論八思巴字」『民族語文』（1980-1、37-43頁）は本表を初期に作られた公式の原字母表と推定する。
- 3) Clauson,G.1959, 'The hP'ags-pa Alphabet' ,*Bulletin of the school of Oriental and African Studies*,XXII,pp.300-323、第322頁参照。
- 4) 中野美代子1964,「蒙古字韻の研究—音韻史的考察—」『北海道大学外国語外国文学研究』11、15-37頁、第17頁参照。
- 5) 中野美代子 1971,『砂漠に埋もれた文字—パスパ文字のはなし—』塙書房、1971年、付表1参照。Miyoko Nakano1971,*A Phonological Study in the 'Phags-pa Script and the Meng-ku Tzu-yn*,Australian National University Press、第39頁及び第45頁参照。
- 6) 照那斯圖 1980,「論八思巴字」『民族語文』1980-1、37-43頁、第39頁参照。照那斯圖・楊耐思 1984,「八思巴字研究」『中国民族古文字研究』中国社会科学出版社、374-392頁、第381頁参照。照那斯圖・楊耐思 1987,『蒙古字韻校本』北京：民族出版社、第8頁参照。